

# 移行対象に示された怒りとその理解 —「治療者が治療者になる」という視点から—

齋藤末夏 明星大学心理相談センター 特別研修員

キーワード：移行対象、投影同一視、プレイセラピー

## 要約

幼児が成長する過程の中に「移行対象」が表れることがある。移行対象は、乳房（あるいは母親）を象徴的に代理し、同時に外的世界と内的世界の橋渡しをする乳幼児の所有物である（Winnicott, 1953）。本稿では、問題行動が先行し、自分の意図を正しく伝えることができなかった10代男児との心理療法について報告した。面接初期において、遊びを通してクライエントから持ち込まれる怒りに治療者が戸惑うことが多く、心理的介入を行うことができなかった。その後、遊びの中で言語化を試み、治療者の中に生じた気持ちをもとに発した何気ない一言が、彼の怒りを和らげるに至った。彼の態度が変容した要因について、遊びの中によく現れた「ぬいぐるみ」は、他者へと向ける外的世界の現実としての暴力や暴言と、相手を痛めつけたいという内的世界の空想との中間領域（Winnicott, 1953）として機能していたと考えられた。また、クライエントの態度を変容させた治療者の一言は、暴力に拠らず対処する手段をクライエントの中に取り入れるにつながったのではないかと考察した。

## I はじめに

子どもとの心理療法を行う上で「遊び」は必要不可欠なものである。大人のカウンセリングや心理療法は言葉によって行われることが多々あるが、子どもは大人ほど言葉による表現が巧みでなく、言葉の誤用や語彙の少なさなどから、言葉では伝えたいことを伝えられなかったり、そもそも何を伝えたいのかを自身の中で明確にすることが難しいと考えられる。

心理臨床の世界では、子どもと言葉ではなく、遊びによる関わりを持つためにFreud, AやKlein, M, Axline, V.M.により遊戯療法（プレイセラピー）が開発され発展してきた。

Winnicott（1953）による「移行対象」は、幼児が肌身離さず持ち歩く、毛布やタオルケット、ぬいぐるみなどで、それらがないと著しく不安になるものである。実物の母親とイメージの母親の中間を担うものであり、象徴としての母親の機能

を持ち、移行対象となりうる物を持っている間は安心して過ごすことができる。しかし、実物の母親に対して思い通りにならない時に幼児が怒りをぶつけたり、愛情や親しみを持って接近するように、移行対象に対しても怒りなどの感情をぶつけたり、とても大切な物であるようにどこにでも持ち歩き、愛情を持って接することがある。また、井原（2006）は、主観的な世界と客観的な世界の中間、内innerと外outerがあり、その中間領域に移行対象は現れる。幼児は移行対象に対して自分のマイナス・プラスの感情全てを表現し、展開し、対象化することで感情をコントロールすることを学ぶ、と述べている。

本稿では、問題行動が先行し自分の意図を正確に伝えられなかった10代男子との心理療法（1年9ヶ月）を報告する。治療者との関わりの中で度々登場していたぬいぐるみに焦点を当てながら、ぬいぐるみが持っていた機能と、治療者との関わり方の変化について「移行対象」「投影同一化」

などの概念と照らし合わせながら考察した。

## II 事例の概要

面接開始時、小学校高学年だった男児のクライアントは、父親、母親、兄の 4 人家族で育った。出生後、言葉と運動の発達に遅れはなかったが、言葉のコミュニケーションができるようになった後、冗談が通じにくいことがあった。新生児期から保育園に預けたが、人見知りもなく母子分離もスムーズであった。その後国外へ転居。現地の幼稚園では女の子たちから人気者であった。一方、厳しいトイレトレーニングによって、できていたトイレが振出しに戻るがあった。

日本帰国後、小学校低学年時に特定のクラスメイトから暴力を受けたが、当時彼は周囲にそのことを訴えなかった。現在も当時の話になると怒りだしてしまうため、詳しい原因・理由は不明。その後クライアントの突発的な暴力暴言が出現。自分の思い通りにならない出来事があると、母親が驚くような怒り方をした。教員に対する暴力も始まり、暴れると大人に押さえつけられて別室に連れていかれる状態であった。当時学級崩壊しており、問題児のうちの一人として扱われ、担任教員の指示でクラスの女の子達に行動を逐一観察され、クライアントは嫌な思いをしたようである。

小学校高学年時の担任はクライアントと上手に関わってくれており、怒りが収まるが多かった。しかし学校管理職から正論で説教されると相手にあざができるほどの殴る、蹴るなどの暴力を振るっていた。医療機関を受診後、自閉スペクトラム症の診断を受け、投薬も開始された。その後、小学校 SC からの紹介を受けて母親が申し込みを行い、来談に至り、筆者がプレイセラピーを担当した。

治療構造は 1 回目から 25 回目まで感染症拡大防止の観点から週 1 回 40 分とし、26 回目からは週 1 回 50 分で実施した。医学的診断を除く上記の事例概要は、主としてクライアントの母との 1

度のインターク面接から得られた情報によって構成されている。

倫理的配慮：本事例は個人情報に配慮した上で論文化することについて、クライアント及び保護者に書面を用いて説明し、研究協力及び論文の公表に関する同意書に署名を得た。また、事例の記述に際し、プライバシーの保護に留意した。

## III 面接経過

初回でのクライアントは母親と共に少し緊張した面持ちだった。短髪で賢そうな印象であった。部屋に入ってから、ここには何とわれて来たのか尋ねると、彼は「特に何も」と答えた。治療者から、抱えているモヤモヤを遊びを通して解決するようなお手伝いが出来たらいいと伝え、毎週のセッションを提案し、その答えは最後に改めて聞くと伝えた。話をした後は彼と部屋と一緒に探索した。彼は小さな買い物かごに入ったダーツの矢を見て「入れ物が違うと思うんだけど…」と呟いた。また、野球をする際に赤いグローブを治療者に手渡して「こうじゃないとね」と話した。治療者は、彼の持つ青いグローブを見て、青色が好きなのか問うと、彼は「そうじゃなくて、性別的に」と言った。その後、絵を描くと言って海・夕日・崖すれすれに建つ家の絵を描いた。治療者は、特に崖すれすれに建つ家は現在彼の置かれている危機的な状況であると感じたが、触れられずにいた。セッションの最後に治療者から頻度を問うと、彼は「毎週」と答えた。

2 回目以降も部屋の探索は続いた。様々なおもちゃを試したり、治療者と卓球をして遊んだ。遊んでいる最中に、おもちゃの車に乗った彼は「部屋が狭いからうまく曲がれない」と部屋の構造に不満を述べた。そこには彼なりの理想があり、それに外れたおもちゃの配置や部屋の構造に対して淡々と指摘しているように思われた。また彼は最初から、使ったものをすぐに片付ける傾向にあった。

5回目以降からは、ホワイトボードに戦闘機などの絵を描いて時間を過ごした。その中で、治療者の顔を描こうとして描き切れず、どうやって描いたら良いのか迷う様子が見られた。

彼の攻撃性を感じ始めたのは8回目以降であった。ストレス発散と称して空気を入れて使うビニール製の起き上がりこぼし（パンチバック）を投げ、蹴っている彼に、どんなストレスがあるのか尋ねると「学校とか」と語った。彼の意向は確認されず、彼の母親と学校関係者との面談を通して、通常学級から支援級への転校が決まり、新しい学校に通い始めて1か月ほど経っていた。

9回目から彼の攻撃対象が治療者と治療者が大切にしているものと称したシルバニアの家と人形たちに変わり、ボールを投げつけ、スポンジ製の弾を撃つ銃で攻撃する様子が見られた。彼は、淡々とした様子でありながらも、治療者の反応を待っているようであり「もっと本気でやって欲しい」と治療者に訴え、おもちゃが散乱した部屋を見て「派手にやった」「片付け頑張ってるね」と言った。後に彼はこの遊びを戦争ごっこと称した。彼は自陣を「最強国」と名付け、治療者側は「アニマル帝国」と名乗った。戦争の中で、彼は治療者にカラーボールを投げ当てて攻撃するが、治療者は彼にカラーボールをぶつけることに抵抗があり、彼を本気で攻撃することが出来なかった。彼の「本気でやって欲しい」という発言から、本気で関わって欲しいということか、彼に問いかけたこともあったが「そういうことじゃない」と言われてしまい、治療者は本気になり切れないままだった。

15回目以降もスポーツなどに形を変えて戦いは続いた。後から彼が考えたルールが追加されるため、治療者はやりづらさを感じていた。彼は治療者を負けさせることにこだわっており、治療者に対して「先生には僕に野球でポコポコに負けてトラウマになってほしい」と話した。野球やサッカーなど、彼が得意としている遊びを行い、治療者を弱い立場に置いた。そして「弱いチームは消

される」と話した。治療者を使って、彼が強いことを示すことが続いたが、治療者は彼との対立に抵抗があり、反応が淡白なものになりやすかった。

スポーツでの対戦が数回続いた後、部屋に置いてあるぬいぐるみを、彼が乗った車で轢く遊びが行われた。彼はこの遊びを「交通事故実験」と称し、ただぬいぐるみを轢くだけではなく、部屋に置いてあった大きい積み木を使って壁を作ってから、壁もろとも車でぬいぐるみに衝突したり、三輪車をバイクに見立て、ぬいぐるみを巻き込んだ玉突き事故を再現して治療者に見せた。度々ぬいぐるみを痛めつけるような行動をとっていたクライアントだったが、スーパービジョンで、このぬいぐるみには彼自身が表現されているのではないかと指摘があった。様々なシチュエーションを用いて自身を傷つけ続けるクライアントに対して、治療者の心は痛んだ。治療者は、こんな事故に巻き込まれたらぬいぐるみは痛いのではないかと問いかけたが、クライアントは「(ぬいぐるみは) 痛いのあんまり感じないから大丈夫だよ」と言った。治療者は何故痛みを感じないのか聞くと、彼は「慣れちゃったから」と話し、すぐに別の事故を再現した。ぬいぐるみを痛めつける行動は毎回のようにセッション内に現れるようになった。また、彼は言葉の表出が多くなかったが、治療者に車の免許を持っているか尋ねた後、車の免許を取って彼の好きな車を運転してみたいといった、彼のパーソナルな部分についての話をしてくれた。

33回目から、彼自身が考えた創造的な遊びを行うことが増えていった。治療者にぬいぐるみの役をさせて、ストーリー仕立ての遊びを行うようになった。最初はぬいぐるみ役の治療者を彼が暗殺する話だった。次は、ぬいぐるみが所有している車を犯人役である彼が盗みに来る話だった。その後、治療者は彼を捕まえる警察役に代わり、直接彼と敵対した。彼は、警察に捕まるが、すぐに脱獄し、ぬいぐるみに復讐をした。同じようなス

トーリーはその後も続き、犯人役・被害者役は彼と治療者が交互に演じた。結末は毎回異なり、犯人が捕まることもあれば、被害者を殺害し警察からも逃げ切る展開になることもあった。治療者が彼の展開するストーリーに身を任せていると、次第に理不尽な目に遭わされることが増えた。治療者は犯人役で、彼の所有する車を盗みに行くが、何度治療者が攻撃しても彼は倒れず、激しい抵抗に遭い、返り討ちにされた。

40回目のセッションで、彼が教師役、治療者がぬいぐるみを用いて生徒役を演じるストーリーが展開された。彼は教師らしく治療者が演じるぬいぐるみに問題を出したり、剣道の稽古をつけるが、ぬいぐるみが問題を間違えると、バットでボコボコに殴り、剣道の練習では刀でぬいぐるみの胴を何度も突き刺す、という「お仕置き」をした。この時、ぬいぐるみを演じていた治療者は理不尽な目に遭わされていることに対して怒りを感じたが、セラピー内で扱うことはできなかった。

42回目のセッションでは、彼がシルバニアの家をスポンジ製の弾を撃つ銃や車を使って襲う行動が見られた。治療者はそれを見て、シルバニアの住人たちは怖いだろうと思い、彼に対して怖かったことやトラウマになるようなことがこれまでもあったか、問いかけたところ「あった」と話した。怖かったのか、再度治療者が聞き直すと「怖くなかった」と訂正し、「だってそんなことはなかったから」と話した。

本ケースの転換点になったのが、ケース開始から1年5ヶ月経った45回目のセッションであった。治療者はぬいぐるみの母親役、彼はぬいぐるみを誘拐する犯人を演じた。治療者とぬいぐるみが自宅で眠っていると、彼はぬいぐるみを誘拐し、部屋に置いてある卓球台の裏にぬいぐるみを隠した。朝になり、治療者はぬいぐるみが居なくなっていることに気付き、近所の人に聞き込みをしたり、警察に相談した後、ついに犯人と直接対峙する。犯人役である彼は、治療者に対して、子ども

を見殺しにして治療者が助かるか、治療者が死んで子どもを助けるかの2択を迫った。治療者は母親役として、子どもが助かる方を選ぼうとするが、理不尽な2択を迫られていることに気が付き「何故殺されないといけないのか、そんなことはおかしい」と言った。その後、彼からこの誘拐はドッキリであったことが告げられ、子どもの誕生日を祝うようなサプライズが行われた。ここでストーリーは終了し、残りの時間は銃の模型にティッシュを小さく丸めた弾を詰めて撃って遊んだ。部屋を出た後、彼は自身の誕生日に母が高いケーキを買ってくれたが、自分では選ばなかったことを治療者に伝えた。治療者は自分でケーキを選びたかったのか尋ねたところ「いや、そういうわけじゃない、美味しかった」と話した。

46回目から48回目までは、銃の模型に様々なものを詰めて飛ばせるかどうかの実験をするようになり、ぬいぐるみに対しての攻撃は少なくなった。時には銃口にティッシュを被せてテープで留め、弾を撃つ時の壁にしていた。同じ銃の模型が2つあったので、治療者も彼と同じように銃に何を入れたら飛ぶようになるかを試していた。

49回目のセッションの冒頭に、治療者は自身が大学院を修了することに伴い、クライアントの担当を続けられなくなることを伝えた。彼の担当を辞めることで転校前の学校のように彼を投げ出すように捉えられてしまわないか、かなり緊張した気持ちであった。彼は、治療者の話を細かく聞きながら聞いており、治療者が最後に話を聞いて彼がどう感じたかを訪ねたところ「まだよく分からない、けど僕も来年中学生になって続けられるか分からないから」と話した。この時の彼は中学入試を控えていた。この頃、在籍する学校で先生を相手にトラブルを起こすことは全くと言っていいほど聞かなくなり、友達との小さなトラブルはありつつも、生活自体は落ち着いていた。その後、銃に物を詰めて飛ばす遊びを少し続けたが「この銃は撃てない、実験終了」とすっぱり打ち切る



ような様子で言った後、クライアントからの提案でサッカーをした。チーム名を決めるとき、彼は自身のチームをダンボールと名付け、治療者側をハサミと名付けた。サッカーの途中から彼はゴールキーパーとしてぬいぐるみをゴールの前に置いた。その日の試合は彼が勝利したが、ぬいぐるみの隙間からゴールされてしまうことが気になっていたようで「(ぬいぐるみが) ぜんぜん守ってくれない」と愚痴をこぼした。次の回でもサッカーを行ったが、彼はぬいぐるみの代わりにエアホッケーの台をゴールの前に置き「これで怖くない」と言った。治療者は彼が気持ちを話すことに珍しさを感じながら、前は怖かったのか聞くと「前はぬいぐるみが全然守ってくれなかったから」と話した。その後、彼はぬいぐるみを監督として棚の上に置いた。次の回では、色のついた積み木をロシアとウクライナに見立てて横に並べ、テニスボールを投げてウクライナを倒さずにロシアを倒す遊びを行った。最後に彼が車を横転させ、ぬいぐるみを置きながら「予期せぬ事故」と言った。治療者は、自分との別れも予期せぬ事故のようなものだったのではないかと、問いかけたところ「うん」と言い、すぐに「おしまい!」と言って退室の準備を始めた。それを見て、彼の中で治療者との別れに向き合えなさがあるのではないかと感じた。その後のセッションでは、本格的なレーシングゲームが欲しい話など、同年代の子と比べて、彼の大人っぽさを感じさせる話をするようになった。この頃、第一志望の中学校に合格し、第二志望の中学校には特待生として合格しており、彼にとって自信を回復できる出来事が続いていた。また、校外学習で彼の語学力の高さから、通訳のような役割を担い、同級生や見学先の施設職員から感謝されるような経験をしていた。中学生になる準備としてスマートフォンや腕時計を買ってもらった話などをしてくれることもあった。

別れについて、治療者から、クライアントとの別れが辛く、寂しい気持ちを抱えていることを伝

えた。彼は話を聞いてくれたが、彼自身がどう思っているかを聞けなかったため、治療者との別れについて思うことがあればいつでも話して欲しいと伝え、「前にボールをいっぱい使ったこととか覚えてる」と話した。以降も彼から別れについてどう感じているのか語られなかったが、卓球をしている時に、彼に付いているぬいぐるみの監督が、彼が試合中ミスをしたり、治療者が打った球がぬいぐるみの監督に当たってしまったときに、彼自身や治療者のチームの監督に対して怒る様子が見られた。

56 回目は、彼とのケースを論文化したいことを彼とその保護者に伝え、同意を得ることができた。その日は、積み木の板を使って駐車場を作り、治療者とクライアントが交互に車に乗って駐車する遊びが展開された。セッションの後半に、次回で最後であることが信じられない気持ちであると治療者から彼に伝え、「一つだけ最後にならない方法があるよ」と言った。その方法について治療者から尋ねると「留年する」と言われ、そうやって欲しいか治療者が再度尋ねると「そうしたら先生が次に進めなくなっちゃうから」と話した。また、その日の別れ際にクライアントから治療者の卒業を祝う花束と手紙を渡された。受け取るか迷ったが、彼自身が前に進むために必要なのではないかと考え、受け取ることにした。最後のセッションでは論文化と治療者との別れについてどのように感じているのか、何度か問いかけたが、彼から明確な反応を得ることは出来なかった。彼が帰る直前に、治療者から最後に伝えておきたいことなどあるか尋ねると、彼は少し迷ったあとに「ありがとうございました」と話した。治療者からは、中学への励ましと、これまでの感謝を伝え、全 57 回のセッションは終了した。

## Ⅳ 考察

### 1. 見立て

国外転居後に通った幼稚園での厳しいトイレッ

トトレーニングや、帰国後に特定のクラスメイトから受けた暴力が、環境に対する彼の認識を変えてしまったのではないかと推測される。また、部屋の構造やおもちゃの配置の仕方など、彼なりに良いと思ったものから外れた環境に対して指摘をする傾向があった。彼は知識も豊富で、知的な遅れは全くみられないが、出来事を説明することに対する苦手が見られた。自閉スペクトラム症の傾向から、考えや興味の幅が偏りやすく、感情表現の困難さから、他者に彼の考えが伝わりきらないことが多かったのではないだろうか。そのため、学校などで発言が否定されると、自身を責められたような感覚になり、他者へ暴力や暴言を使って攻撃されないように身を守っていたのではないかと考え、他者との関わりの中で、環境から脅かされたとき、暴力に拠らずとも対処できるという自分自身への信頼感と、周囲への安心感を持つことが必要なケースであると考えられた。

## 2. 面接経過

セッション開始直後は、部屋を探索したり、卓球などのルールに則った遊びをすることが多かった。遊びの中で、部屋の構造などに対する指摘はあったものの「使ったものは片づける」「物を壊さない」などの一般的なルールの範囲から逸脱する行為をしないよう気を付けている様子であった。当時のスーパービジョンで治療者は彼に対して、観察的で距離のある関わり方であることが指摘されていた。振り返ると、彼とのプレイセラピーが初めて担当するケースであったこと、また治療者自身の言動が彼を悪い方向に変化させてしまうことを恐れていたこともあり、治療者の生身の反応が得られないことが、治療初期、彼に治療者の絵を描こうとして描けない、捉えきれない印象を与えていたのではないかと考える。

戦争ごっこでは彼の怒りが最も顕著に表れていた。彼の意思を十分に確認しないまま普通級から支援級へ転校し、1か月ほど経った時であり、当時の親面接で、彼が学校に対して「あそこは学校じゃない」と母親に訴えたと伝え聞いていた。通常学級から支援級に転校させられたことは、彼のプライドを傷つけることに繋がり、セラピー内で自分よりもっと高い能力を有していること、理不尽な目に遭わされていることを治療者に伝えていたのかもしれない。セラピー内でも、治療者は彼から理不尽な目に遭わされ、治療者が何をどこまで許してくれるのか、彼から試されているように感じることもあった。しかし治療者は彼から持ち込まれる怒りに戸惑うことが多く、当たり障りのない反応をすることしかできなかった。

戦争ごっこが終わった後も、治療者とクライエントが対戦する遊びは続き、対戦の中で「弱いチームは消される」と話した。現実場面で、弱い立場に立たされたクライエントは、低学年の時のように弱い立場であることにより、周りから攻撃される不安を感じていたのだろう。その後も対戦や実験を通して、彼から治療者に対し、理不尽な目に遭わされたが、彼の持った怒りを感じつつもどのように扱ったらよいのか迷う時期が続いた。

45 回目のセッションから、治療者が彼から持ち込まれた理不尽さについて言及したところ、彼の態度が変わり、怒りの表現から、喜びに遊びの内容が変化した。数ヶ月ストーリーを展開し、内容が治療者の予想とは大きく異なる展開を見せたことになり戸惑ったが、彼が求めていた治療者の生の反応に触れたこと、また彼が現実場面で感じていた理不尽さに治療者から触れたことがきっかけとなり、治療者とストーリーを展開する必要がなくなったのではないかと考える。その後、銃の弾丸という怒りの象徴を作り、調整する遊びに変化した。この遊びは、治療者が変更になることを伝えたタイミングで終了してしまったが、最後に「この銃は撃てない、実験終了」と話していた。

暴力的な手段で意思を伝えることから一歩離れようとする彼なりの意思表示だったのではないかと思う。

治療者から彼の担当を続けられなくなることを伝えた後、彼は治療者との遊びの中で「前にボールをいっぱい使ったこととか覚えてる」と戦争ごっこについて触れた。治療者との別れの直前に渡された手紙にも、戦争ごっこの話が書かれていた。彼の中では、ボールをたくさん使って戦争ごっこをしたことで、彼がどう振舞ってもこの場所がなくなることはないという安心感を与えたのではないかと思う。彼の感じていた理不尽さを理解してもらえたこと、彼自身がどのように振舞っても投げ出されない場所や治療者との関係が、彼の怒りを表現する方法に変化をもたらしたのではないかと考えられた。治療者が交代すると知った後も、卓球やサッカーの試合中に、彼のチームの監督が治療者側のチームに対して怒りを表現することはあったが、同時に自身の成長を治療者に伝え、治療者が安心して卒業できるように、気遣うような発言もしていた。また、治療者に対して卒業せずに担当を続けて欲しいような気持はありつつも、そうすると治療者が前に進めなくなる、と彼自身が納得できるような理由付けをし、感謝を伝えるような手紙を書いて区切りをつけようとしているようにも見えた。

### 3. ぬいぐるみの意味

彼とのセラピーには度々ぬいぐるみが登場していた。ぬいぐるみは、彼から攻撃を受けることが多く、その行為は「ストレス発散」と称されることもあった。45 回目のケースの転換点を迎えるまで、この攻撃は執拗に続いており、時には治療者に対して攻撃を見せつけ、そのように振る舞わなければならない、といった必死さを感じさせた。

Winnicott (1953) の論じた移行対象とは、「毛布やタオルケットなどに向ける激しい愛着行動であり、母から得られないための代償的な執着では

なく、現実の母から得られなくなった幻想的な一体感をイメージの次元で得ようとする試み」である。移行対象となりうる毛布やタオルケットは、現実の母親とイメージの母親の中間領域を作り出す。いわゆる移行対象の役割のように、今回の事例におけるぬいぐるみは、他者へと向ける外的世界の現実としての暴力や暴言と、相手を痛めつけたいという内的世界の空想との中間を担っていたのではないかと考えられる。

移行対象と似た概念に空想のお友達 (Invisible Friend : IF) がある。森口 (2014) は「IF とは、名前を持ち、数ヶ月間継続して、ある種のリアリティを伴って子どもが相互作用する目に見えない存在のことである」という Svendsen (1934) の説明を引用し IF に加えて、ぬいぐるみは人形のように、人格を与えられたモノ (Personified Object : PO) も空想の友達として含まれることがあると述べている。また、井原 (1996) は、Nagera (1981) による「スケープゴート (外在化) ため」「万能感とコントロール可能と感ずるため」「孤独・無視・拒絶に耐えるため」「いろいろな変化に耐えるため」という空想のお友達の機能を紹介している。本事例では空想上のお友達は“ぬいぐるみ”が該当し「スケープゴート (外在化) ため」「万能感とコントロール可能と感ずるため」は、彼が経験した小学校低学年時のいじめや、高学年時の通常学級から支援級への転校などが、彼の中に生まれた「弱く、周りから理解されず排除される自分」抱えることができず、ぬいぐるみにその役割を押し付け、自分から切り離せると考え、攻撃を重ねていたと考えられる。彼との遊びの中に表れるぬいぐるみへの攻撃には、どこか悲しさを感じるが多かった。彼の考えを受け入れてもらえない悲しさや、彼の意思を無視した形で行われた転校の辛さから耐えるために、ぬいぐるみへの攻撃を行っていたと推測した。

#### 4. 心を使った介入について

治療者は、セッション開始直後から彼が抱えているであろう危機感や怒りを感じていたが、その言語化に対する迷いがあった。また治療者自身の経験の少なさから、治療者のそういった試みが彼の状態を悪化させるのではないかとという恐れがあった。喜田・内沢（2006）は、初学者が心理的援助の中で行き詰まる要因の研究で「なんと返答してよいか分からない」などの返答についての回答があったと報告している。この背景には、心理的援助の本質的な理解への不十分さが関係している。初学者である治療者にも、言語化への迷いと、彼の状態を悪化させることへの恐れがあった。これは、彼とのセラピーを有意義なものにしなければならないという考えから生じた焦りであり、彼の内面を深く理解できていなかったため、言語化を試みては彼に「そういうわけじゃない」と否定されてしまったと推測される。

8回目のセッションから、彼の攻撃性が顕著に現れ始めた。これは、彼の支援級への転校が行われてから1ヶ月ほど経った時期と重なる。転校が行われてからすぐに、彼は母親に対して「あそこは学校じゃない」と訴えた。彼が所属していた普通級とは異なる教育やクラスメイトの様子を見て“自分の知っている学校とは違う”と感じ、その一員になったことを受け入れられなかったのではないかと推測される。弱い立場に立たされたことによって生じた「自分には弱い部分があるのかもしれない」という不安感から逃れるために、弱い立場を治療者やぬいぐるみに押し付け、戦いを通して勝利することで「自分は強いままであり、社会的な立場は変わっていない」と思っていたのかもしれない。

Kernberg（1984）は「投影同一化は耐えられない心的経験から逃れるための、また不快な状況を排除する防衛手段である」と述べている。また、Ogden（1986）は投影同一化における3つの位相を示している。第一位相は「自分自身の一部を

他者の中に預けるという、無意識的な投影的空想」である。彼の場合は、自己からの攻撃によって危機に瀕している部分は「普通級から支援級に転校することで直面した“他者から受け入れられない弱い自分”」であり、それを遊びの中で治療者に弱い立場を担わせることによって、自分の中から無くそうとしていたのではないかと考えられる。第二位相は「他者（治療者）にかかる対人的圧力。それによってその他者は無意識的な投影的空想に一致するように自分自身を体験し、振る舞う」である。戦争ごっこやストーリーを展開する遊びの中で、彼は治療者を弱い立場にして遊び、最終的には治療者を負けさせる展開にすることが多かった。また「こうやったら負けないよ」などと遊びの中で治療者の振る舞いを矯正しようとすることもあり、本気で戦わせることを望んで圧倒的に倒したい気持ちを感じることもあった。第三位相は「誘発された体験の受け手（治療者）による処理、およびそれに引き続いて起きる投影する側による再内在化。それによって、一度は（空想の中で）排出した自分自身の一部の修正版が（取り入れや同一化によって）再内在化される」である。遊びの中で、治療者は彼から攻撃され、理不尽さにイライラすることはあれど直接的に反撃することは少なかった。理不尽な扱いに耐えながらも45回目のセッションで、治療者から理不尽な扱いについて言及することで、暴力ではない伝え方を取り入れるに至り、現実場面での問題行動がなくなるに至ったのではないかと考えられる。この時、志望校に合格し、彼の行きたい進路を実現できたことも、弱く排除された自己像を払拭し、自信に繋がったのではないだろうか。

45回目のセッションに至るまでのストーリー展開の中でも、彼から持ち込まれた感情が表れていた。転校直後は、支援級への拒否感を示し、クラスメイトともトラブルが起こったが、徐々にクラスの中に友達と呼べるような存在ができたり、喧嘩になっても、その場で直接的な手段ではなく、



担任に報告するなどの解決方法を獲得している段階であった。セッション全体を通して、彼は治療者に対して優位な立場に立ち、理不尽な目に遭わせる展開を選ぶことが多かった。戦争ごっここの序盤では、治療者は彼に対して一歩引いているような態度で接してしまい、彼が理不尽さを伝える機会を無くしてしまっていた。その後のスポーツでの対戦などを通して、セッションの中盤から、治療者側も彼から持ち込まれる怒りに対して受け止めようとする気持ちが徐々に育ち、戦いが成立するようになったことで、彼が治療者に理不尽さを伝える機会が生まれたのである。

## V おわりに

彼とのセッションが始まってからしばらくは、彼に対してどのように接したら良いか、正解を探するような気持ちになってしまい、観察的な関わりになってしまっていた。しかし、このままでは、彼の問題行動や怒りを和らげることはできないと感じ、どのように近づけば良いか悩み、セッション内で感じたことなどをなるべく伝えるように心がけた。上手く言語化できず、セッションが終わってから「こう伝えたらよかった」と後悔することも多かったが、彼と向き合い続け、同じような展開を繰り返すことで、とっさに出た言葉が彼の感じていた現実に対する理不尽さと重なり、彼の生きづらさを軽くする一助になったのではないかと思う。同時に、治療者として、自身の気持ちを使ってクライアントと関わることに對する理解が深まったように感じる。初心者である治療者が、治療者としての姿を知るにあたり、大事な出来事であった。今回の知見はあくまで一事例から得たものであるため、今後も治療者として考察し続ける必要がある。

## 謝辞

大学院での臨床実践および本稿の執筆に際して、日頃から厳しくもあたたかい御指導をいただ

きました、明星大学心理相談センターの富田悠生先生に深く感謝申し上げます。

## 文献

- 井原 成男 (1996). ぬいぐるみの心理学―子ども達の発達と臨床心理学への招待― 日本小児医学出版社
- 井原 成男 (2006). 移行対象の臨床的展開―ぬいぐるみの発達心理学― 岩崎学術出版社
- Kernberg O.F. (1984). Severe personality disorders : Psychotherapeutic strategies. New HaveYale University.
- 喜田 裕子・内沢 沙紀子 (2006). 心理臨床におけるロールプレイ実習の基礎的研究―初学者は、どのように行き詰まるのか― 富山大学人文学部紀要 Vol.45, pp.13-29
- 森口 佑介 (2014). 空想の友達―子どもの特徴と生成メカニズム― 心理学評論 Vol.57, No.4, pp.529-539
- Nagera.H (1981). The developmental approach to childhood psychopathology. Jason Aronson
- Ogden T.H. (1986). The Matrix of the Mind: Object Relations and the psychoanalytic Dialogue 藤山直樹 (訳) (1996). こころのマトリックス 岩崎学術出版社
- Sullivan H.S. (1953). Conceptions of Modern Psychiatry. Norton&Company Inc 中井久夫・山口隆 (訳) (1976. 現代精神医学の概念 みすず書房
- Svendsen, M. (1934). Children's imaginary companions. Archives of Neurology and Psychiatry, 32, pp.985-999.
- Winnicott D.W. (1953). Transitional objects and transitional phenomena. Routledge 橋本雅雄 (訳) (1979). 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社

---

Anger shown in the transitional objects and its understanding : From the perspective of “the beginner becomes the therapist”

SAITOU, Mika

School of psychology, Meisei University

### **Abstract**

The transitional objects may appear during infant development. This refers to a possession of the infant that symbolically represents the breast (or mother) while bridging the gap between the external and internal worlds (Winnicott, 1953). In this paper, I report a play therapy session with a teenager who was unable to communicate his intentions correctly because of preceding behavioral problems. During the initial stages of the interview, the therapist was often confused by the client's anger expressed through play and could not provide psychological intervention. Later, the therapist tried verbalizing the client's anger through play, and a casual remark based on the feelings aroused by the therapist eased his anger. Regarding the factors that contributed to the change in attitude, it was considered that the stuffed animals that often appeared in play took the place of an intermediate area (Winnicott, 1953) between the external world that is the reality of violence and verbal abuse directed toward others and the internal world that is to hurt the other person in the fantasy. The therapist's words that changed the client's attitude may have led the client to adopt coping methods that could avoid violence.

**Key Words :** The transitional objects, projective identification, play therapy

---